

第12回 **ダイワハウス コンペティション** 作品募集

# 都市に住む快樂

テーマ

住宅は、機能を満足させ生活を守ると共に、喜びや楽しさ、まだ見ぬ幸せを掻き立てるものであってほしい。それら人の感性に訴える「快樂」をキーワードに、自身の内から湧き出る欲望に素直になって住宅を考えてください。光、風、音、季節、時刻など、身体的な感覚も空間を生み出す素材となるでしょう。自身の価値観が空間を決める要素になるかもしれません。一方で「都市に住む」という投げかけは、多様な選択肢をもつ都市において、場所のイメージや周囲との関係を語ってほしいからです。身勝手な「快樂」ではなく現代の都市に住む意義も見出ししてください。どのような都市を設定するかは自由です。また住宅という概念にこだわらず、ある時間を過ごす場所というイメージで「住む」空間を提案してもよいです。自らが考える「快樂」とは何か他者に説得することが必要です。想像力を大きく膨らませ、誰もが考えつかなかった、そして誰もが羨むような「都市に住む快樂」のアイデアを期待します。

## 【審査委員】

審査委員長

**小嶋一浩** 建築家 CAIパートナー  
横浜国立大学建築都市スクールY-GSA教授

審査委員

**堀部安嗣** 建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授

**平田晃久** 建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学准教授

**南川陽信** 大和ハウス工業 執行役員

## 【賞金】

最優秀賞(1点) 200万円

優秀賞(2点) 各30万円

入選(4点) 各10万円

(以上、1次審査通過7作品)

大和ハウス工業賞(1点) 30万円

佳作(10点) 各5万円

総額380万円 ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。  
※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金金額の配分を変える場合があります。

登録・提出締切：2016年9月26日(月)消印有効

詳細は下記ウェブサイトをご覧ください

<http://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社 後援：株式会社新建築社

Daiwa House  
大和ハウスグループ

## 「都市に住む快樂」を考える



座談会風景。左から、南川氏、堀部氏、小嶋氏、平田氏。

## 座談会参加者

**小嶋一浩** (建築家 CAIパートナー  
横浜国立大学建築都市スクールY-GSA教授)

**堀部安嗣** (建築家 堀部安嗣建築設計事務所  
京都造形芸術大学大学院教授)

**平田晃久** (建築家 平田晃久建築設計事務所  
京都大学准教授)

**南川陽信** (大和ハウス工業執行役員)

## 建築の喜びとは何か

**南川** 今回で、ダイワハウスコンペティションは第12回を迎えます。前回の第11回の課題「呼吸する家」では、社会問題や環境などさまざまな意味で「家が呼吸する」ことをテーマにしたところ、社会と住まいに対してポジティブでバラエティに富んだ優れた案が集まりました。今回も、「住宅」を課題の土台として、前回に引き続き内容を深めていきたいと思っています。よろしくお願いたします。

**小嶋** 近年、コンペに参加する学生や若い方が全体的に少なくなっている傾向があるので、大学1年生からでも参加しやすいテーマにできればと考えています。前回、前々回のテーマを振り返ってみると、自分の身の周りのものをしっかり観察したことを設計・アイデアに取り込んで欲しいというものでした。しかし一方では、人の感性に訴えるような提案が少なかったため、そういうものを喚起するテーマが考えられないかと思っています。私は公共建築や学校のプロジェクトを多く手がけていますが、発表する時には制度や地域の特性など、どうしても客観的な説明が増えがちです。しかし、事務所で模型をひたすらつくるような作業はそうした説明のためではなく、その背後にある言葉にしにくいものを見つけるためです。実際の設計では感性が重要なんですね。前回の応募案を見ると、現在の日本の社会問題を意識

したことはよかったのですが、提案が現実的なことやプログラムに偏りすぎている印象を受けました。そうではなく、建築そのものの喜びを追求するものや、住宅から都市をどう変えられるか、壮大なスケールで考えられた夢のあるアイデアを見たいと思います。そこで「都市に住む快樂」をキーワードに挙げたいと思います。

## 徹底することにより「快樂」に到達する

**堀部** 今、若い人が何を見て、何を大切に思っているかを知りたいですね。前々回の「径の生まれる街」、前回の「呼吸する家」というテーマは、家と、それを取り巻く環境や地域などの相対的な関係で成り立っているテーマでしたが、今回挙がっている「快樂」という言葉は主体的で、肉体的で、身体感覚的な点が良いと思います。一人称で建築を考える時、どういうものが出てくるか非常に興味深いです。

**平田** 何かよいことをしてやろう、という善意は意外と弱くて、何か面白いことをやってやろうとか、「快樂」を求める欲望や欲求のようなものが実は人にとって魅力のあるものに繋がっていくのではないかと思います。

**堀部** 求める機能を「自邸」としてもよいのではないのでしょうか。自分の「快樂」を求めなければ自邸というものはつくれません。あなただったらどういう場所に、どういう家に住みますかという問いかけにすると課題に向き合いやすくなると思います。例えば、道路を挟んだ隣同士の雑居ビルを買って自邸にするなど、今までに見たこともない自邸のあり方が生まれるのではないかと私自身の想像も広がります。その人の身体感覚や価値観から建築について考えることが、「快樂」に繋がるのではないのでしょうか。

**小嶋** 「都市に住む快樂」というフレーズは、私が昨年末に出した本『現代建築家コンセプト・シリーズ21 小嶋一浩+赤松佳珠子 / CAI | 背後にあるもの 先にあるもの』(LIXIL出版)の中で「12のストウディオーロ(MM1221)」(新建築1002)という集合住宅について説明する時に用いたフレーズです。この建築は、南麻布の小さな敷地に2棟建つ5層のペンシルビルディングです。1棟には6戸の住戸が入っており、1階以外はメゾネットやパズルのような複雑な構成です。1戸の面積は大きく取れないので、その中でいかに快適な空間をつくるかを考えました。壁面の圧迫感をなくし、余白を感じ取れるように仕上げを粗面のモルタル掻き落としにしたり、大きい家具を入れることができないので棚を増設できるように壁面にあらかじめ「ガチャ柱」という仕掛けを設けたり、スイッチやインターホン、照明などを上手く隠すことで、小さいながらも空間の広がりを感じることができる空間としています。しみじみとしていたり、ささやかな感じだと「快樂」とはいえず、「ここまでやるのか」とあつけに取られるくらい徹底しないと「快樂」にまでは行き着かないような気がします。

**堀部** 「快樂」という言葉には、ほかの言葉では置き換えられない魅力がありますね。正しさだけでは説明できない何かがあると思います。

**平田** 道徳的ではないということですね。「幸せ」というと道徳的なものが見え隠れしますが、「快樂」というと無茶をしている感じも受けます。誰か

らも褒められないけど羨ましがられる、みたい。どこかに自分もやってみたいと憧れてしまう感じがしますね。

**堀部** 昔、安藤忠雄さんが長屋の屋上にコンクリートのブロックとベニヤでできた「大淀の茶室」（『新建築』8901）をつくりましたが、そこにも「快樂」のイメージがあります。

**小嶋** 本来茶室は、侘び寂びがあって、「快樂」に到達してさえいけばよいという世界ですよね。しかし、現代で茶室というと皆、「快樂」とは捉えません。だから杉本博司さんの「ガラスの茶室」を見ると、あの人は「快樂」志向の人なんだと感じます。

**堀部** この課題の解答には、いろいろなものに囲まれていることが「快樂」と感じるタイプと、むしろすべてを手放して、ないことや持たないことが「快樂」だと感じるタイプというふうに真二つに分れるのではないかと思います。

**小嶋** 確かにそうですね。ブルゴーニュのすごくよいワインに囲まれていたら私は「快樂」だと思うけど、その隣の部屋にはシャンパンがいっぱいあって、その隣に焼酎の部屋もあったら、それはもう「快樂」ではないと思います(笑)。

**堀部** もっと特化しろよ、という感じですね(笑)。

**平田** 「快樂」と考えた時に、京都にある円通寺が思い浮かびました。比叡山を見るためだけに要素をそぎ落としたすごくシンプルな借景の庭園をつくり、それによって比叡山を所有したかのように感じることはできるのは、すごく「快樂感」があるような気がします。

**堀部** 何かを得ようと思ったら何かが失われる、そういう関係で成り立っているのが「快樂」なのでしょう。

**南川** 「快樂」を得るにはそのひとつのために何かを我慢したり、住み方を変えたりとある種の覚悟がいるということですね。

**小嶋** 中には100LDKを「快樂」だという人もいるかもしれないけれど、たくさんもっているほど偉いぞという競走になってしまうと知的性でなくなってしまう。建築としてしっかり考えてほしいです。

**平田** そうですね。ちゃんとした設計力も見たいですね。

**編集部** 若い世代が「快樂」といった時に一体どんなことを想像するのでしょうか。前回のテーマ会議で堀部さんが「プログラムなど抽象的な部分は自分の先生が研究しているものに引き寄せられて、学生自身が考えることが少ないのではないかと」危惧されていましたが、今回の「快樂」というテーマでも、その問いかけは重要だと思います。

**堀部** 本当に自分がここに住みたいと考えて設計しているのか、それとも自分が住むわけではなく、誰か物好きが住むと思って設計しているか、どちらを考へながら設計するのは重要だと思います。常識的に考えたら誰も住まないような環境に、こんなにも楽しく住むことができますよと強く主張してくれる提案が出てきたらよいですね。



## 「都市」について考えること

**編集部** この課題のもうひとつポイントとしては、「快樂」と「都市」を結びつけているところにあります。前回の公開2次審査の時に平田さんが、「都市全体を使うなど、ダイナミックな提案や、建築にはここまでできるんだと示すアイデアがすごく少ない」とおっしゃっていたのが印象に残っています。

**平田** 「快樂」はもちろん個人的なことを起点にしていると思うのですが、もう一方でそういったものが集合すると大きなことに繋がっていく側面もあって、そこが面白い点だと思います。そういう意味では「快樂」を考えることと「都市」を考えることは結びつくのではないかと思います。

**南川** そうですね。「都市に住む」と聞いて、まず初めに東孝光さんの「塔の家」（1966年）を思い出しました。あの建築は家の中に全部を囲い込むのではなく、都市を利用し尽くすことであの狭小地でも楽しみながら住むことができることを示しています。それは「快樂」と繋がっていると思います。

**小嶋** ひとつの建築を提案するのももちろんよいのですが、どこかに居着き、利用し尽くすことで快樂を獲得しているんだというタイプの提案が出てきても面白い。屋上を占有することで円通寺のような借景を楽しめるんだ、とかね(笑)。

**平田** 都市とはある一定の集積が起こった時に訳の分からないことが起こっている場所のことで、本来的には現実の場所というよりも、そこで起こっていることの質の問題なんだと思います。どんな場所でも建築のあり方によっては都市にできるし、いわゆる都市と呼ばれている場所でも都市ではない場所はあると感じています。要するに「快樂」性があるところが都市なのではないかと思っています。都市について考えることで、「快樂」とも連続したダイナミックなアイデアを提案できる可能性があるように思います。

**小嶋** 確かにそうですね。また、都市とは選択可能性の開かれている場所だと思います。つまり人間関係でも飲みに行く場所でも何でもいいけど、いろいろなことを主体的に選ぶことができる場所です。ただ「快樂」は主体的なだけけど、都市に対しては相対化しないと面白くないでしょう。

## 「住む」ことの可能性の極北

**編集部** 「都市に住む快樂」がテーマとして見えてきています。応募者には自分自身にとって「都市」をしっかりと定義してもらわないといけませんね。

**平田** たまに全然都市とは思えない文脈のことを「都市」だとい切る人もいますからね。

**小嶋** 「都市に住む」と投げかけているのは、「都市」というものをしっかりと定義することも必要で、周りとの関係を語らず主体的で空間的な「快樂」ばかり主張してもダメだからです。



**南川** どういうふうに分自なりのストーリーを肉付けすることができるのかが重要だと思います。例えば、8畳間にトイレが1個あるだけの部屋みたいな思いつきではなくて、その背景にある切り口を感じさせる提案をしてもらえると面白いですね。

**堀部** 自分が応募者だったら、新築なのか改築なのか、もう少しヒントがほしいですね。

**小嶋** 堅苦しくいうと「住む」ということの可能性の極北みたいなものを見たいと思っているのですが、ただ単に極端なものに住めばよいといっているわけではなく、そこには「快樂」を伴っていなければいけません。

**編集部** 自邸という話も出ましたが、根本的に求められるものは住宅でよいのでしょうか。

**小嶋** 住むという概念自体をあまり決めずに、ある時間を過ごす場所というくらいでよいのではないかと思います。住宅というと、キッチンやトイレが必要だと思われるので。

**編集部** そちらの方がより「都市」と「快樂」を結びつけやすそうですね。

**小嶋** 自分にしか使えないトイレを都内に5つ持っているとか、移動を絡めた提案もできそうですね。

**堀部** 東京の混沌や矛盾に満ちた都市を知らない地方の大学の学生は、「都市」についてどのように考えるのでしょうか。イメージだけで片付けてしまうと、都市部に住む学生に遅れを取ってしまうような気もします。

**編集部** 東京に行ったことがないとしても、この情報社会なら「都市」が現在どのような状況なのか想像がつくと思います。

**南川** 私の場合は「都市」というと東京をイメージしますが、応募者が必ずしも東京をイメージするとは限りません。その捉え方は多様であってよいと思います。

**小嶋** 原広司さんは「都市」か「都市でない」かはディスクリート（離散的な）であるかないか、とおっしゃっていました。離散集合として独立して要素を取り出すことができるのか、それともひとつ取り出したら全部くっついてしまうのか。全部くっついてしまうのは「都市」ではなくて、地縁社会や血縁社会のような強い関係性をもっているものです。そこさえはつきりしていれば「都市」だといえると思います。そういう自分の中の「都市」の定義をしっかりと定めた提案をしてほしいですね。

**編集部** では、今回のテーマは「都市に住む快樂」で決定したいと思えます。敷地は任意に設定してもらいますが、どのような定義で「都市」をとらえるか、どのように住むのかをしっかりと表現することも求めたいと思います。

## 応募者に期待すること

**平田** 私たちの世代と比べて今の学生たちは何に対して喜びを覚えるかが



変わってきていると言われています。果たして本当に変わっているのか、そして変わっているのならば、こういう快樂があり得たのかと思わせてくれる提案が出てきてほしいですね。

**南川** 「都市」に住み、「快樂」を得るためには覚悟がいると思います。それを喚起するポジティブで楽しくなる提案を期待しています。

**堀部** 「快樂」を求めるならば、自分の身体感覚に忠実にならなければと思います。嘘はつかないで、正直に思考を深めてほしいですね。

**小嶋** 嘘をつくな、ということは重要ですね。私は、「もっと何かを想像せよ」といいたい。想像を深めることによって「こんなところに住めるか」と一見思ってしまうような案も出てくると思います。今の若い人はシェアハウスに住んだりといろいろな住まい方を実践しており、私たちよりも保守性がないので、まったく思いもつかなかった住み方も出てくるかもしれません。ただ、逆に今の若い人たちには欲望がなさすぎてまったく共感できない提案が出てくる可能性もあります。

**堀部** インターネットカフェで「快樂」が満たされていますからね。そんな案ばかり出てきたらどうでしょう(笑)。先ほど平田さんが「快樂」とは人に憧れられるものだと話していましたが、共感できない「快樂」はどう扱うか、「快樂」自体を審査するのか、それがきちんと提案に落とし込まれていけばよしとするのか、その判断が難しそうですね。

**小嶋** 好き嫌いの話ではないので、まずどういうことを「快樂」と思っているのかがこちらに伝わらないと審査のしようがありません。そのうえでその「快樂」が、提案としてどれくらい練られているかを審査していくべきでしょう。価値観の審査になってしまうのは避けたいですね。

**堀部** その人が「快樂」なんだと表現しているものが、自分はそれに「快樂」を感じないけれど、この人は真面目に自分の「快樂」を表現しているんだと思えるくらい定義と表現に密度があれば文句はないですね。

**小嶋** 例えば、最上階の真ん中にバスタブがある住宅で、屋間の自然光が入ってくるようなベントハウスのバスタブが「快樂」であるとした時に、提出物の表現として単にユニットバスが描かれていたのではダメですね。屋間の光が反射している水面は確かによいかもしれない、と思わせる表現力が問題になる。その人がどのくらいの思い入れをもって「快樂」を考えているかは重要になると思うので、提出物は基本的に規定せず、自分自身が感じる「快樂」というものを説得するための圧倒的な表現が出てくることに期待したいですね。

(2016年4月20日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

